

『修理屋』論

— 苦悩によりて昂められ —

田 江 安 廣

(1993年10月15日 受理)

On *The Fixer*: Growth through Suffering

Yasuhiro TAE

『アシスタント』(1975)と並ぶバーナード・マラマッド(1914-1986)の傑作『修理屋』(1966)は、それまで作者が多く描きつづけたニューヨークのうらぶれた下町から末期の帝政ロシアへと背景を移し、いわれなき少年殺しの疑いで投獄されるユダヤ人ヤーコフ・ボックを主人公に配して、ヤーコフの牢獄での苦悩、苦悩の超克を描いた作品である。

マラマッドの描く多くの主人公の例に洩れず、ヤーコフもまた、新しい生活を求めている。彼の住む村(shtetl)はロシアの中では孤立し、隔絶されていて、重苦しい貧困が支配している。シュテートルはヤーコフにとっては墓場であり、離島であり、牢獄である。そこには貧困はあっても成功の機会は存在しない(Opportunity here is born dead.)¹⁾。ヤーコフが求めるものは腹一杯の食事、仕事、ささやかな教育である。『新しい生活』(1961)に登場する、もと飲んだくれの主人公レヴィンが人生をやり直すべく西部に旅立ち、森の中で人生に何を求めるのかをポーリンに問われたとき「秩序、価値、成就、愛」(order, value, accomplishment, love)²⁾と答える部分があるが、ヤーコフも「幸運、成就、豊かさ」(good fortune, accomplishment, affluence [p. 25])を希求しているのである。シュテートルを出るのはユダヤ人にとって危険だと承知しながらも、ヤーコフはキエフに向う計画を立て、そこでうまくいかねば、アムステルダムからアメリカへ向うつもりだと義父のシュムエルに説明する。シュテートルに閉じこめられたユダヤ人がアメリカを新天地と考えたのはきわめて無理からぬことだった。東欧からアメリカに移住し、ひとかどの成功を収めた作家メアリ・アンティン(1889-1949)は当時の様子を自伝『約束の地』(1912)で次のように記している。「みんながアメリカのことばかり口にしていました。(中略)子供たちは移民ごっこをして遊びました。(中略)話は移民のことばかりでした。しかし、この魔法の地についてたった一つの事実さえほとんど誰も知らなかったのです」(America was in everybody's mouth... Children played at emigrating... All talked of it, but scarcely anyone knew one true fact about this magic land.)³⁾。新天地アメリカに移住しようとするユダヤ人たちの様子はアーヴィング・ハウの『われわれが父たちの世

界』(1976)に更に詳しい。移住の動機は「富、土地、変化、平穩、自由、そして言葉に表現出来ない何かに対するあこがれ、これらがすべて入り混じったもの」だったのであり、彼らは「新しい生活を求めるべく、いつでも住み家を変える準備が出来て」いたのである (a mixture of yearnings for riches, for land, for change, for tranquility, for freedom, and for something not definable in words... a readiness to pull up stakes in order to seek a new life.)⁴⁾。

ヤーコフにシュテートルを去る決意をさせたのも、ハウの描くユダヤ人たちと同じく、新しい生活への希求であった。もっともヤーコフはアメリカにではなく、まずキエフに向うのであり、自ら牢獄だと看做していたシュテートルを後にした彼を待受けていたものは他ならぬ本物の牢獄であった。

I

牢獄はマラマッドの作品に繰返しあらわれる重要なモチーフの一つであるが、その意義は後に触れる。その前にいま一つの重要なモチーフ、親子の関係について触れねばならない。『修理屋』には数組の親子が描かれる。ヤーコフを取りまくロシア人はユダヤ人に対する無知、偏見、憎悪、畏怖を体現した人物がほとんどであるが、例外も存在する。看守コギンは投獄されたヤーコフの日々の懊悩をつぶさに目撃しており、ためにヤーコフに対する副刑務所長の冷酷きわまりない扱いから彼をかばおうとして射殺される。コギン自身が生きることの哀しみを痛感しており、それがヤーコフをかばうという行為となってあらわれるのだが、彼の苦しみは息子が殺人犯、娘が父親ほども年の離れた男の子を宿すという家庭の悲劇に起因している。父親ほども年の離れた年齢の男の子を身籠る娘のエピソードは作者の心を離れなかつたらしく、『ドゥービンの生活』(1979)に結実し、娘はパークレーの女子学生モードとして、コギンは伝記作家ウィリアム・デュービンとして13年後に描き直されることになる。

マーファと息子との関係はさらに重要である。一体、マラマッドの作品において母親の影がうすく、母親が十分に描かれるには『デュービンの生活』を待たねばならないが、それまでに描かれる母親は概して冷酷でヒステリックな女性像が多い。『ナチュラル』(1952)のロイの母親がその典型である。ロイの母親は煮え立った浴槽で猫を溺死させるほどの人物であるが、マーファも愛人に酸の入ったピンを投げつけ失明させるほどのヒステリーである。それだけではない。少年の殺害はマーファの愛人とマーファの仕業である。何よりも痛烈なアイロニーは誕生を願いつづけたにもかかわらず子供を授からなかったヤーコフが子供を授かったにもかかわらず、わが子を殺害した母親の罪を着せられ、投獄される点である。親子関係の点から、ヤーコフとマーファは対極をなしている。また、マーファはロイの母親をさらに肉付けした人物と考えることが出来るであろう。

ヤーコフと両親との関わりはどうであろうか。ここでもヤーコフはマラマッドの他の作品の主人公たち、例えばロイ、フランク、レヴィン同様、孤児である。ヤーコフは自らの生立ちをふり返り、

苦々しげに次のように語る。

俺は孤児同然の生まれだ。母親は俺が生まれて10分後に死に、父親がどうなったかあんたも知ってのとおりだ。(中略) みじめな子供のときからずっと、いやったらしい孤児院で育ったんだ。俺は夢の中で食べ、夢を食らっていた。(p. 9)

ヤーコフが「あわれな父親」と述べるにはわけがある。彼の父親は泥酔したロシア兵の発砲した銃弾で不条理にも命を奪われたのである。ヤーコフには義父シュムエルがいるが、『アシスタント』のモリスがフランクに与えるほどの精神的影響力を持ってはいない。もっとも、モリスが愚直な生き方そのものを体現した人物だとすれば、シュムエルもまた同じタイプに属する人物ではある。どのような貧窮の中にあってもシュムエルはそれを誰のせいにもしないし、まして神を呪うことなど決してないからである。

少年殺しの捜査官ビビコフにも息子がいる。興味深いことに、ビビコフの息子はヤーコフと同じく、ぜんそくもちである。しかもヤーコフとビビコフが愛読するスピノザも呼吸器を患っていたのは周知のとうりである。デューラントの描くスピノザが参考となる。

スピノザはいまわずか44才、しかも友人たちは彼の余命が少ししか残っていないことを認めた。なぜなら彼は肺病の血統に生まれただうえに、働いていたほこりまみれの環境と引きこもりがち生活ではこの生まれながら不利な条件を正す役には立たなかった。ますます彼は呼吸困難に苦しむようになり、年々肺は弱っていった⁶⁾。

『アシスタント』ではフランクの理想とする人物はアシジのフランシスである。フランク・アルパインの頭文字 (F.A.) がフランシスのそれ (Francis of Assissi) と一致するのは象徴的だが、『修理屋』ではヤーコフとヤーコフの愛読するスピノザが共に呼吸器に疾患を持っているという仕掛にかわっている。フランシスは清貧と鳥と花とを愛したが、『アシスタント』では清貧はフランクの働く店の持主モリスに、鳥と花のイメージはモリスの娘ヘレンに体現され、それぞれがフランクに影響を及ぼす。そしてモリスの死後、フランクは父親的存在のモリスの精神的遺産を受けつぎ、ユダヤ人に改宗し、第二のモリス・ボーバーとなる。一方、『修理屋』において父親的役割を果たすのはビビコフである。彼にぜんそくを患う息子がいることがこの関係を象徴している。ヤーコフはビビコフ、スピノザの影響下でどのように変貌してゆくのであろうか。以下、その変貌のプロセスを考察する。

II

ヤーコフの精神的変貌を知るには、投獄される以前のヤーコフの言動を知る必要がある。投獄される前のヤーコフは一口で言えば利己的人間であった。極貧の中にあっても誰も責めず、神を信じて

生きる義父とは対照的に、ヤーコフは自らを呪い、ユダヤ人を呪い、運命を呪い、神を呪う (…he blamed existence. [p. 9] …he blamed fate. [p. 12])。神を忘れるなという義父にヤーコフはどう答えるであろうか。「頭にガンと一撃をくらわせ、顔に小便をひっかけること以外に神が何をしてくれるというんだ。神のどこを敬えというんだ (“What do I get from him but a bang on the head and a stream of piss in my face? So what’s there to be worshipful about?” [p. 19])」これがヤーコフの返答である。ヤーコフにとって、神は人間に関心を示さず、永遠の中に鎮座して、宇宙に眺めている何者かである。彼に必要なのは今日食べるパンである。

ヤーコフは政治にも関心を示さない。

ありていに言えば政治は嫌いだ。理由はさかないでくれ。活動家だろうが何だろうが、それが何の得になる。俺の生まれつきなんだろう。哲学はあまり知らないが、どちらかと言えば俺は哲学向きに出来ている。(p. 19)

妻に音楽家と駆落ちされ、自暴自棄におち入ったヤーコフに同情の余地がないでもないが、それとて子供を授からないという理由で彼が妻に対してとった思いやりのない仕打ちが原因である。ヤーコフは心残りになるものは何もなく、シュテートルを後にする。ユダヤ人特有のひげをおとし、シュムエルからもらった聖句箱、お祈り用ショール、祈禱書もドニエプル川の底に沈めてしまう。ユダヤ人であることを否定する象徴的行為である。

獄に投じられた後のヤーコフはどうであろうか。彼はユダヤ人であるが故に暴行や辱めを受けつづける。屈辱的な姿勢での日々の身体検査。囚人や官憲から加えられる肉体と心への暴力。仲間を装った男の客告(スピノザも仲間の密告を受けたことがある)。食事への毒物の混入。ゴキブリの死骸の浮いたスープ。冬期には飲み水も凍結するほどの牢獄。苛酷な牢獄の状況を描く作家の筆は細緻にわたり、余すところがない。足の傷口が化膿して、かかとが判別できないまでにふくれあがったとき、ヤーコフはいかなる扱いを受けたであろうか。歩行できないヤーコフは看視にこずかれながら診療所まで地面を這ってゆかねばならない。しかも切開は麻酔なしで行われる。医師は殺された少年の痛みが、これで分ったろうと毒づく。いつ果てるともしれない苦しみの中であって、何がヤーコフに自殺を思いとどまらせ、何が彼を支えつづけたのであろう。この間に答えることは同時にヤーコフの変貌の原因を探ることでもある。

ヤーコフを支えたものとしてまず考えられるのは、きわめて稀であったが、ある特定の人々が彼に示した人間的な行為である。ヴィクトール・フランクルは『夜と霧』の中で、彼を感動させたある看視兵について記している。涙が出るほどフランクルを感動させたのは看視兵が彼に与えた一片のパンではなく、「彼が私に与えた人間的なあるものであり、それに伴う人間的な言葉、人間的なまなざし」⁷⁾であった。手脚に血をにじませながら地面を這ってゆくヤーコフを見かねて、一人の囚人(ビビコフを想わせる、レンズにヒビの入ったメガネをかけている)は看視の制止を無視し、命の危険をかえりみず、ヤーコフの脚に包帯を巻こうとする。ふとしたことから、殺人を犯した囚

人フェッチェコフは「石橋はこわれることがあっても、真実はいつか明るみになる」(“The stones of the bridge may crumble, but the truth will come out.” [p. 139])とヤーコフを励ます。そして看守コギンがヤーコフをかばおうとして副刑務所長に射殺されるのは前述したとうりである。こうした人間的な行為、人間的な言葉、人間的なまなざしが、ヤーコフが牢内で生きぬく支えの一つとなったのである。

次に挙げるべきはヤーコフの苦しみ方の徹底性であろう。彼は悲しみぬき、嘆きぬき、悩みぬき、泣きぬいた。フランクは強制収容内で飢餓浮腫が癒った友人の話を紹介しているが、その友人の説明は「私がそれを泣き抜いたからです」というのであった。涙を流し得ることは、恥ずべきことではなく、「苦悩への勇気という偉大な勇気」⁹⁾のあかしであり、精神にある種の浄化作用をもたらす。

ヤーコフに自殺を思いとどまらせた要因として第三に挙げるべきはスピノザの自己肯定、生の肯定という考えである。定理23でスピノザは言う。「自分自身を保持しようとする努力は徳の最初にして、しかも唯一の基礎である。」⁹⁾さらに定理67で彼は言う。「自由な人間は何よりも死について考えることがない。そして彼の知恵は死についての省察ではなく、生きることの省察である。」¹⁰⁾スピノザを愛読し、スピノザから大きな影響を受けたヤーコフが、積極的な生への意志、存在への勇気を学び得たことは十分に根拠のあることである。

さらに大きな支えはビビコフの存在である。ビビコフは偏見に満ちたロシア人の官憲の中にあっ、ただ一人ヤーコフの無実を確信している人物である。ヤーコフの無実を晴らすべく奔走するビビコフが、牢獄を最後に訪れたとき残す言葉はビビコフの信念と人格を物語っている。

いいかね、ヤーコフ・シェブソビッチ、もし君の命に価値がないのなら、私の命にも価値がないことになる。もし法が君を守れないなら、それは結局、私をも守れないのだ。それだからこそ、君を落胆させたくない。それこそ、私の不安の原因なのだ、つまり君の期待に沿えないことがね。それではおやすみを言わせてくれ。とにかく二人とも眠るよう努めよう。明日はもっといい日になる。明日のことを神に感謝しよう。(p. 159)

正義を貫こうとする高潔なビビコフならではの言葉であるが、これがヤーコフが生前のビビコフから聞いた最後の言葉となる。ビビコフは公金横領の罪を着せられ、ついには死に至らされる。ビビコフの死について、繊細なインテリ特有の弱さから来る自殺だと見るむきが多い。ジェフリー・ヘルターマンは床に落ちたビビコフのビビの入ったメガネはインテリの盲目性を暗示していると考え、ビビコフの死を当然のごとく自殺だと看做して、ビビコフを批判しているが¹¹⁾、はたして、そうであろうか。ビビコフの死を自殺と見れば、それまでのビビコフの存在の意義そのものを否定することになる。ビビコフの信念、人格、ヤーコフに及ぼした影響、すべてである。苛酷な状況であくまで耐えぬく凡人ヤーコフのしぶとさと、自殺して果てる知識人のもろさとの際立った対照。なるほど、この対比の妙はそれなりに興味深い、ここは事件の真相に迫ったビビコフを当局が謀殺

したという見方に立ちたい。ヤーコフ自身もビビコフは殺されたと確信しており、面会に来た弁護士にそう告げているのである。

ビビコフの死によってヤーコフは大きな心の支えを失う。しかし子が親の死を乗り越えて成長してゆかねばならないように、ヤーコフはビビコフの教えを糧として、成長してゆく。またビビコフは幻影となってヤーコフの前に姿をあらわす。

ヤーコフに自殺を思いとどまらせ、究極的に彼を支えつづけたものはヤーコフ自身の利他的人間、政治的人間への変貌そのものである。変貌の萌芽はビビコフとヤーコフとのスピノザについての問答の中にすでに存在する。スピノザの言う自由についてビビコフは次のように説明する。

彼〔スピノザ〕は恐らく国家一統治一の目的は理性的人間の安全と自由だと感じていたのだ。これは人間に出来得る限り、考える自由を与えるということだ。彼はまた、彼自身がすごしたような孤独の中に暮らすより、社会生活に参加するときのほうが、人間はより自由だと考えてもいた。社会の中の自由な人間は隣人たちの幸福と知的な解放を促進するのに積極的な関心を寄せると考えたのだ。(p. 173)

これは定理73にある「理性に導かれる人は自分自身にのみ服従する孤独の中にいるよりも、むしろ共同の決定に従って生活する国家の中であってこそはじめて自由である」¹²⁾を説明したものである。ビビコフはヤーコフ自身の哲学について、スピノザについて問い、「スピノザは自らを解放しようとした人物」(…“he was out to make a free man out of himself”. [p. 71])、「生活が今より良くなり得ること」(“…it's that life could be better than it is” [p. 71])というヤーコフの返答を得ると、より良い生活は政治という裏付けなくして、いかにして可能かと、さらに問いかける。ビビコフは人間存在が非政治的であり得ぬこと、自由とは人のために自由を創り出すことを言わんとしているのである。

利己的で政治に無関心であったヤーコフ・ボックはユダヤ人の中から、たまたま彼がスケープ・ゴートに選ばれたことを知り(ボックはやぎの意)、命がけで面会に来た義父シュムエル、妻レイスル、弁護人との面会、牢内での読書(聖書)を経て、著しい内面の深化を体験する。それは同時に外の世界に目が見開かれることでもあった。迫害を行っている人々こそが真の囚人であり、自由本来の意味を知らず、投獄されたヤーコフが自由の意味を知ったのである。ヤーコフはこの認識に苛酷な体験を通じて到達する。「彼自身が体験であった。」(…It was he. He was the experience. p. 283)

強制収容所の生活を余すところなく描いたフランクは、利己的な人間は自らの不幸を嘆くあまり、内的にも、心理的にも、身体的にも崩壊する傾向があったのに対し、家族、友人、恋人、やり残した仕事などのために生きようとする利他的な人間が収容所生活により良く耐え得たことを証言している。また「人間が本来ただ未来の視点からのみ、すなはち何らかのかたちで「永遠の相の下に」存在しうることは人間に固有なことである」と述べている¹⁴⁾。ヤーコフは利他的人間に変貌し

たとき、「より良く耐える」ことが出来るようになったのである。自らのユダヤ性を拒絶していたヤーコフはユダヤ人同胞に対する責任感に目覚め、未来の一点、即ち裁判の日、目指して生きぬこうと自らに誓う。

俺は生半可なユダヤ人だ。だがユダヤ人を守ろうとするだけの血は残っている。つまるところ、俺はあの人たちを知っている。あの人たちがユダヤ人として生きる権利、人間らしくこの世に存在する権利を信じている。ユダヤ人に敵対する連中は俺の敵だ。出来得る限り、ユダヤ人を守るのだ。これは自分と結んだ契約だ。もし神が人間でないなら、俺が人間にならねばならぬ。だから裁判まで耐えぬき、奴らのうそっぱちを俺の無実で証明してやらねばならぬのだ。耐えつづけ、待ちぬく以来に俺に未来はない¹⁵⁾。

待つという行為はメシアを待望するユダヤ教の際立った特徴である。神学者のバウル・ティリヒはキリスト教とユダヤ教を比較し、キリスト教では決定的な出来事（メシアの出現）はすでに生じたことと考えるのに対し、ユダヤ教では来たるべきもの—新しい国と神の統治—はまだ実現されていないとその違いを説明している¹⁶⁾。待つというヤーコフの決意は彼のユダヤ性への回帰を暗示し、また、この言葉を好んで用いる作者のユダヤ性を示している。

次にヤーコフの変貌を検証しよう。ヤーコフの変貌はいくつかの場面で確認することが出来る。まず妻レイスルとの面会の場面である。馳落ちしたレイスルは男子を産み、男と別れて、獄中のヤーコフに父親になってくれと涙ながらに懇願する。涙の味を知りつくしたヤーコフは、妻の苦しみを察し、父親になることを引き受ける。マラマッドの作品では主人公が父親の役割を引受け得ることは主人公の人間としての成熟を示す共通の符丁となっている。フランク然り、レヴィン然り、ヨジップ然りである。

牢獄にあらわれたビビコフの亡霊を前にしたヤーコフの言葉も、彼の変貌を物語っている。「私は尋常ならざる洞察を得ました」(“I’ve had an extraordinary insight” [p. 286])とヤーコフはビビコフの亡霊に言う。それは何かねと尋ねるビビコフに、ヤーコフは次のように答える。「私の内の何かが変わったのです。私は昔の私ではありません。おびえることが少なくなり、憎むことが多くなりました」。(“Something in myself has changed. I’m not the same man I was. I fear less and I hate more.” [p. 286])

以前はひたすら官憲の権威と暴力に、おそれ、おののくだけであったヤーコフは、国家の存在の目的、自由の真の意味、法と正義のあるべき姿に対する認識に到達したとき、ビビコフや彼自身に対する扱いに象徴される理想とかけ離れた国家の姿に憎しみを抱くことが出来るまでになったのである。彼の憎しみは憎しみのための憎しみではない。法と正義と自由が犯され、人間の尊厳が踏みみにじられているという認識から生じる抑えがたい、いきどおりである。かくして裁判へと向う護送車の中で彼は皇帝ニコライと幻想の中で対峙する。社会の周縁に位置するヤーコフと中心に位置するニコライ、修理屋とツァーが対峙するのである。ヤーコフは、あなたの皇太子は血の中に何かが

不足して血友病なのだが¹⁷⁾あなたに足りないのは洞察力だ、みじめな者たちへの洞察力が欠けている。あなたは自分では親切だと言うが、それを虐殺で証明しているのではないかと批判する。私にはどうしようもなかった、人民の意志だ。私は犠牲者だと答える皇帝に向かってヤーコフは発砲する。「小さな父」(Little Father)と呼ばれる皇帝は国民に対し、父たる役目を果たしていなかったのである。幻想の中でさらにヤーコフは次のように考える。

一つだけ俺は学んだ、と彼は思った。非政治的人間など存在しない。殊にユダヤ人はそうだ。ユダヤ人で、非政治的であることなど不可能だ。それは明白すぎるくらいだ。じっと座ったまま滅ぼされるのを待っていることは出来ない。

その後、彼は考えた。闘いのないところに自由は存在しない。スピノザは何と言っているだろう。もし国家が人間に反する振舞いをすれば、それを滅ぼした方がより害が少ない。反ユダヤ主義者に死を。革命万才。自由万才¹⁸⁾。

ナチスに国を追われ、アメリカに亡命したユダヤ人の心理学者エーリヒ・フロムも自由について言う。「自由が存在していると言うことはほとんど出来ない。むしろ自由を獲得するというべきである」(We can scarcely say that there is freedom; we should rather say we obtain freedom.)¹⁹⁾ 自由とは自由をおびやかす障害との絶えざる戦いのプロセスである。

ヤーコフはビヒコフ、スピノザの教えをバネとして、牢獄での苦悩によって、自由の真の意味に到達した。フランクフルトがリルケを援用して言うように「苦悩の極みによって昂められ」たのである²⁰⁾。

Ⅲ

『修理屋』は幻想の中での主人公による皇帝殺しで終わるが、これはフレーザーの『金枝篇』に見られる「王殺し」を念頭に置いたものと見ることが出来る。この神話的モチーフはホーソーンの「私の親類モリヌー少佐」(1832)にも用いられており²¹⁾渡し守によって主人公が川を渡る場面(ユング派心理学解釈によれば精神的変貌の暗示)²²⁾が描かれるのも共通している。インタビューの中で、ラマッドは『修理屋』執筆の動機は父親(マラマッドの父はロシアからの移民)から聞いたベイリス事件であったと答えている。マラマッドは執筆にあたって、歴史上の事実「鼻づらを引きずり回されるのを嫌って」²³⁾それを「消し去ろう」("disinvent")と試みたと説明している。即ち作品に神話性を与えようとしたのである。この手法は現代のベース・ボールにバーシバル伝説を潜ませた『ナチュラル』(1952)でも生かされている。

牢獄はマラマッドの作品に繰返しあらわれるキー・メタファーである。これを彼のユダヤ性を表現する特徴的メタファーだと看做す批評家もいる²⁴⁾。マラマッドは1975年のインタビューで、このメタファーについて以下のように説明している。

歴史を通じてすべての人間のディレンマをあらわすメタファーです。必然は第一の牢獄です。もっとも鉄格子はすべての人に見えているわけではありません。それから社会の不平等、無気力、無知…のような人間の造った牢獄があります。(中略)我々のもっとも大きな発明は人間の自由です²⁵⁾。

ロシアからアメリカに移住したユダヤ人を父に持つマラマッドにとって、自由と必然の問題が心を離れることがなかったのは容易に推測出来るし、父の祖国を舞台として、ユダヤ人問題を正面から扱ったのも、彼の血と心情からすれば当然の成行きであったろう。

最後にタイトルの由来について述べよう。作品のタイトルや主人公の名前は、書齋で考えついたものは不自然なものが多い。そこで書齋から外に出て、目についた名前を利用するのだと川端康成がどこかで述べたことがある。マラマッドはタイトルをつけた経緯をインタビューで次のように語っている。

ベニントンに赴任する前に、私はオレゴンで教えていました。ほとんど毎日、目にする看板がありました。「修理屋ジム」というのです。タイトルはここから来ているわけです。あなたは今、専売特許を手に入れたんですよ。このことは誰にも話したことはないんです。いいですね²⁶⁾。

注

- 1) Bernard Malamud, *The Fixer* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1966), p. 10. 以下、この作品からの引用はこの版を用い、ページ数のみ本文に記す。
- 2) Bernard Malamud, *A New Life* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1961), p. 189.
- 3) Mary Antin, *The Promised Land* (1912; Princeton: Princeton University Press, 1985), p.
- 4) Irving Howe, *World of Our Fathers: The Journey of the East European Jews to America and the Life they Have Found and Made* (New York: Simon & Schuster, 1976), p. 27.
本書はベストセラー欄に名を連ねたことがあるが、ハウはこのことについて、アメリカでは誰でも数時間は有名人になれると冗談まじりに述べたことがある。
- 5) 『修理屋』にはこの他にも、いくつかのアイロニーを見出すことが出来る。ヤーコフは三度、人助けをするが(旅の途中での老婦人、行倒れになった反ユダヤ主義者レベドフ、子供たちに襲われ傷ついた敬虔なハシッド)、そのいづれもが、彼を不利な状況におとし入れてしまう。
- 6) ウィル・デュラント、『西洋哲学物語』林松正俊訳(講談社学術文庫, 1993年)上巻, p. 259.
- 7) ヴィクトール・フランクル、『夜と霧』霜山徳爾訳 フランクル著作集第一巻。(みすず書房, 1971年), p. 196.
- 8) フランクル, p. 185.
- 9) スピノザ、『エティカ』下村寅太郎編 世界の名著第25巻 スピノザ, ライブニッツ(中央公論社, 1981年)所収, p. 286.
- 10) スピノザ, p. 325.
- 11) Jeffrey Helterman, *Understanding Bernard Malamud* (Columbia: University of South Carolina Press, 1985), p. 71.
- 12) スピノザ, p. 330.

- 13) フランクルは強制収容所内では稀ではあっても、著しい内面化の傾向があったことを指摘し、それは恐ろしい周囲の世界から精神の自由と豊かさへと逃れる道が開かれていたためだと説明している。かくして、フランクルによれば、「かくしてのみ繊細な性質の人間がしばしば頑丈な身体の人々よりも、収容所内の生活をよりよく耐え得たというパラドックスが理解され得るのである」。pp.121-122.
- 14) フランクル, p. 177.
- 15) この部分は抽出話法で描かれている。三人称を一人称で訳出した。
- 16) パウル・ティリヒ, 「キリスト教とユダヤ教の対話—マルティン・ブーバーについて—」マルティン・ブーバー, 『対話の倫理』野口啓祐訳 (創文社, 1972年) 所収, p. 238.
- 17) マラマッドの作品には一貫していくつかのイメージが用いられる。『修理屋』では血のイメージが全篇を貫いている。まず予兆がある。ヤーコフが義父に見送られてシュテートルを去る場面で、主婦が膝の間に血まみれのにわとりをはさんで、羽毛をむしっているところを目撃する。そして「みぞには屠殺人が儀式用にほふたと分る血だまりがあった」(A pool of blood in the ditch marked the passage of the ritual slaughterer. [p. 17])。さらに向こう側には、黒いひげを生やしたやぎが杭につながれている。これらの描写はヤーコフがかけられる嫌疑「儀式のための幼児殺害」(ritual child murder)を暗示している(メアリ・アンティンはこの点について自伝の中で言及し、異教徒の間ではこれが事実として受け入れられていたと述べている。アンティン, p. 7. 参照)。マラマッドは他の作品にも予兆を多く利用しているが、インタビューの中で、予兆は学生のころシェークスピアの劇を勉強中、はじめて意識したと述べている。マラマッドによれば予兆とは「ドラマの始まる前にドラマを創造する様式」(a mode of creating drama before a drama)である。彼の作品を読む楽しみはこのような点にもある。
- 以下、血のイメージがどのように一貫して用いられているかを見てみると(1)殺害された少年の血(2)ヤーコフがキエフに向う途中で馬にむちをくれるが、馬の傷口からの出血(3)淋しさからヤーコフを誘惑するジーナの経血(4)ロシア人の悪童から襲われたハシッドの額からの出血(5)囚人から襲われたときのヤーコフの頭からの出血(6)皇太子の血友病(ここにも親と子のモチーフがある)とつづく。他にいくつかの血のイメージは見出すことは出来るが、ここでは主なものを挙げるにとどめた。尚、予兆についてのマラマッドの説明は次の本を参照のこと。Lawrence Lasher ed., *Conversations with Bernard Malamud* (Jackson: University Press of Mississippi, 1991), p. 109.
- 18) 大江健三郎は雑誌 SWITCH で氏が影響を受けた作品、愛読書を挙げ、マラマッドの『修理屋』のこの部分に対する愛着に言及している。SWITCH, (扶桑社, 1990年3月号) p. 72. 参照。
- 19) Erich Fromm, "Introduction" in *The Nature of Man* (New York: The Macmillan Company, 1968), p. 14.
- 20) フランクル, p. 185.
- 21) トリリングはかつて大学の講読向けのテキストを編み、作品に短いエッセーを附したことがあるが、この中にホーソーンの「私の親類モリヌー少佐」も含まれている。トリリングはこの短編について、今日の読者はフレーザーの『金枝篇』に描かれる「王殺し」を想起せずに読むことは出来ないと述べている。Cf. Lionel Trilling, *Prefaces to Experiences of Literature* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1967), p. 71.
- 22) C. G. ユング, 『人間と象徴』河合隼雄訳 (河手書房新社, 1972年), p. 220.
- 23) Lasher ed., p. 16.
- 24) Robert Alter, "Jewishness as Metaphor" in *Bernard Malamud and the Critics* eds., Leslie A. Field and Joyce W. Field (New York: New York University Press, 1970), p. 33.
- 25) Lasher, p. 40.
- 26) Ibid., p. 21.